横浜歴史研究会　令和７年　６月例会

遠田千代吉

「こもりくの初瀬」

1. はじめに

初瀬は、北は三輪山(467m)に連なる山々、南は外鎌山(忍坂山とも称す・292m)を前面とする山々に囲まれた谷である。中ほどには古刹として有名な長谷寺がある。さらに遡れば吉隠に至る。旧郡区分では、吉隠が磯城郡と榛原郡の郡境で、吉隠を過ぎれば榛原郡となり、角柄を経て西峠を下れば榛原の地が拡がる。今、近鉄大阪線に乗り桜井を経て、初瀬谷に入れば、左の車窓に暖かな陽ざしを浴びて初瀬の集落が点在する。のどかにたたずむ、この初瀬にも、時の向こうに歴史が息づいている。

(1)雄略天皇・国賛の歌

初瀬朝倉に宮を構えた雄略天皇は、雄略６年２月、泊瀬の小野に遊びたまひ、国賛の歌を詠った。(『日本書紀』)

「隠国の泊瀬の山は
　　出で立ちのよろしき山　走り出のよろしき山の
　隠国の泊瀬の山は
　　あやにうら麗し　あやにうら麗し」

ここに表された「隠国」(こもりく)は、「隠口・隠り処」とも表記され、初瀬の地に冠される枕詞である。語源については諸説があるが、初瀬が「山に囲まれた地」であることから、その地勢を表す意と捉えるのが分かりやすい。また、後にふれるが、「初瀬は葬地」の一面を持つことから、そのイメージにつながる枕詞ともなっている。

(2)初瀬のイメージ・枕詞の比較

古代地名につながる枕詞は、その土地の特性をよく表している。また、それを比較することにより、さらにその土地の特性が浮かび上がる。試みに、この手法により初瀬の特性・イメージを掴んでみよう。

「あおによし」　→　「奈良」
「おしてる」　→　「難波」
「あさもよし」　→　「紀伊」
「こもりくの」　→　「初瀬」
「おきつもの」　→　「名張」

「こもりくの」は「奥まった、こもった地」、加えて、葬地故に「悲しみの処」のイメージが思い浮かぶ。
これから榛原を始点に西峠を経て、初瀬の谷を下ってみよう。

2. 西峠と墨坂神社

峠は未知なるものとのふれ合いの場である。そこでは「憧れ」と「恐れ」が交錯する。初瀬谷の最奥部に西峠はある。上古、西峠付近は墨坂とも称され、大和から東国への出口・東国からの入口であった。ここに墨坂神社が祀られた。西峠の「天の森」東南には古い坂道があって「すべり坂」という。口碑によると墨坂神社は、もと天の森にあったと伝えられ、森の東北には「角(すみ)のうら」の小字が残る[註 1]。社記では墨坂神社は文安 6 年(1449)峠上から榛原の地に遷宮した。旧地には小祠が造営され、残り祀られている。

(1)墨坂神社

現在墨坂神社は峠から遷り、榛原の宇陀川南岸に鎮座する(宇陀市榛原萩原 703)。近年は「健康祈願の神」として多くの人々が訪れている。例祭は、毎年 11 月 2 日・3 日に秋祭りとして行われる。この時の宵宮には、西峠の天の森の旧地御旅所から古式にのっとり渡御(お渡り)があり、行列の先頭には、当社ゆかりの赤盾と赤矛が立つ。この赤盾・赤矛には、歴史的な由来が背景にある。

(2)『日本書紀』崇神天皇条

第 10 代崇神天皇の代、国内に疫病が蔓延し死者が多数出た。このことにつき、『日本書紀』(以降『紀』)は次のように記す。

崇神 9 年春 3 月 15 日
「天皇の夢に神人有して、おしえて曰はく、「赤盾八枚・赤矛八竿を以て、墨坂神を祀れ。
黒盾八枚・黒矛八竿を以て、大坂神を祀れ」とのたまふ」。
同　4 月 16 日
「夢の教の依に、墨坂神・大坂神を祭りたまふ」。

ここに登場する墨坂神が墨坂神社の祭神である。一方、大坂神は二上山北側の穴虫峠にある大坂山口神社(葛城・香芝市穴虫)とされている。墨坂、大坂はそれぞれ大和(ヤマト)から東方と西方へ通じる要路の境界点(峠)であり、この峠で蔓延する疫病を鎮止すべく盾・矛を以て峠神を祀ったのである。「入ってくる峠で防ぐ」、このことは我々のコロナという疫病の流行のとき、近くに経験している。
この『紀』に記す八枚の盾、八竿の矛が、今の祭りの渡御の先頭に立つ盾と矛なのである。今も脈々として峠の神・墨坂神が、国を守るべく祀られているのである。

3. 吉隠と吉隠陵

吉隠は初瀬谷で、榛原郡との郡界にある最奥部の集落である。地名表示としては、桜井市吉隠(旧磯城郡初瀬町大字吉隠)となる。吉隠の「隠」(バリ)は墾(ハリ)であり、「新たに開墾された地」とされる。吉(ヨ)は美称である。この吉隠は古くから拓け、語感もよいことから万葉歌の題材にも取り上げられている。この吉隠には、初瀬谷の中でも唯一の「陵」(みささぎ)が存在する。吉隠陵である。

(1)吉隠陵

吉隠の東北、榛原郡との境界をなす国木山の尾根の頂部に「陵」はある。街道沿いの小さな立て札に従い、山道の藪をかき分けながら登れば、高所に陵が静かに佇んでいる。志貴皇子(天智天皇皇子)妃・紀橡姫(きのとちひめ)の陵である。

南面する小円墳であり、『延喜式』に「吉隠陵」として次のように記されている。

「皇太后　紀氏、在大和国城上郡

　　兆域　東西四町　南北四町　守戸五烟」

この古墳は、明治12年(1879)に宮内省により陵に治定された。

奈良時代後半、志貴皇子と紀橡姫との間に生まれた白壁王(光仁天皇)が改めて天智皇統を開く。光仁～桓武～平城～嵯峨へと今に続く王統を考えれば、この紀橡姫の眠る「吉隠陵」は重要な陵であり、再認識が必要である。ここで改めて志貴皇子と紀橡姫を振り返っておく。

(2)志貴皇子

志貴皇子は天智天皇(中大兄皇子)と道君伊羅都売との間に生まれた。「道君」は越・加賀の南部大聖寺付近を勢力下におく、豪族であったと思われる。道君伊羅都売は、父名は未詳であるが道君を出自とする采女と推定される。従って母の出自からすれば、皇子とは云え、天皇への道は難しい位置にあった。志貴皇子の薨年は『続日本紀』に次のように記される。

霊亀2年(716)8月条

「二品　志貴親王薨。親王、天智天皇第七皇子也」。

生年は、斉明5年(659)頃と推定され、享年58歳とされている[註2]。

志貴皇子は天智皇子として、ただ一人奈良時代に及んでも生存し、後に、子・白壁王が光仁天皇となった。光仁天皇の宝亀元年(770)の即位に伴い、父志貴皇子には「春日宮御宇天皇」の称号が追尊された。志貴皇子の陵は、田原の地「田原西陵」である。

志貴皇子は『万葉集』に名歌六首を残す。ここに代表する二首を記す。

巻1-51

「采女の　袖吹きかへす　明日香風

　　都を遠み　いたずらに吹く」。

巻8-1418

「石走る　垂水の上の　さわらびの

　　萌え出づる春に　なりにけるかも」。

(3)紀橡姫

橡姫は紀氏に出自をもつ。橡姫の父は、紀朝臣諸人である。諸人は八世紀前半の官人で、往時武人としても名をはせた。名族紀氏は分流も多く、その位置づけは明確でない。

志貴皇子妃は、天武皇女の託基皇女を始めとして何人かが数えられ、紀橡姫は、そのなかの一人とされている。かつて吉隠を訪れたとき、道路に沿う家の軒下に「橡姫は吉隠に隠棲した」旨の掲示がなされていたが、何故この地に隠棲したのか、また、何故高所の国木山頂部に葬られたのか、不明である。

紀橡姫にも、光仁天皇の即位翌年に「皇太后」の称号が追尊された。

4.初瀬と長谷寺

初瀬川を遡れば、川は初瀬の集落で初瀬川と吉隠川に分かれる。左側初瀬川本流の源には奥深く山国が拡がっている。この川の合流地、初瀬山(548m)山麓に長谷寺はある。山門前から山麓に延びる参道には、大きな門前町が形成され、にぎわっている。今、長谷寺は初瀬谷を代表する古刹として人々の信仰を惹きつける。その長谷寺の歴史を辿ってみよう。

(1)長谷寺

長谷寺は桜井市初瀬にある寺で、真言宗豊山派の総本山である。創建については、天武朝の創建とも伝えられているが、『国史大辞典』では諸史料の考証の結果として、次のように述べている。

「僧道明が沙弥徳道らを率いて、十一面観音の造像を中心に、養老 4 年(720)～神亀 4 年(727)の頃に創建された」[註 3]。

当地はもともと、古来山密信仰の地であり、「山寺」があったものが、上記のように奈良時代に本格創建に至ったと推定される。

国宝である本堂をはじめ、その伽藍は威容を誇り、本尊は像高 10.18mの十一面観音像である。西国第八番札所として古来観音信仰で人々の信仰を集めている。

平安時代には貴族の初瀬詣でが盛行、平安末期から中世にかけては武家・商人に移り、室町時代以降は一般庶民の参詣が主流となっている。

(2)平安時代紀行文にみる初瀬詣で

平安時代貴族の初瀬詣での様子を、その紀行文に探ってみる。

○『蜻蛉日記』

安和元年(968)7 月～9 月

「かくて、年ごろ願あるを、いかで初瀬にと思ひ立つを、立たむ月にと思ふを、さすがに心にしませねば、からうして九月に思ひ立つ」。

天禄 2 年(971)7 月

「さて、(つつしむ所に)七、八日許ありて、初瀬に出でたつ。巳の時ばかり家を出づ。

人いとおほく、きらきらしうてものすめり」。

○『更級日記』
永承元年(1046)
「そのかへる年の十月二五日、初瀬の精進はじめて、その日京をいづる。又、初瀬にまうづれば、はじめにこよなくたのもし。所々にまうけなどして、いきもやらず」。
ここに見るように、ともに身の精進、潔斎をして、その後出かけているのである。

5.脇本と脇本遺跡
　三輪山の南麓に桜井市脇本はある。この地区は初瀬谷の入口ともいえる地域で、ここを過ぎると谷は急激に狭くなっていく。従って初瀬谷の中でも、脇本地域は比較的平野部が拡がる。この状況から、この地域には古来「宮」が置かれた。
(1)初瀬に置かれた宮
　『紀』に記された「宮」をみると次の通りである。
○第21代　雄略天皇(大泊瀬幼武天皇)　　泊瀬朝倉宮
雄略元年/前年11月
「天皇、有司に命せて、壇を泊瀬の朝倉に設けて、即天皇位す。遂に宮を定む」。

○第25代　武烈天皇(小泊瀬稚サザキ天皇)　　泊瀬列城宮
武烈元年/前年
「太子、有司に命せて、壇場を泊瀬列城に設けて、あまつ天皇位す」。

○大伯皇女　斎王選任
天武2年4月14日
「大来皇女を天照太神宮に遣侍さむとして、泊瀬斎宮に居らしむ。是は先ず身を潔めて、稍に神に近づく所なり」。

この三つの「宮」の中で、武烈天皇の宮は、脇本地域からはやや奥にはずれ、出雲地区かとの見解がある。
(2)脇本遺跡[註4]
　脇本遺跡は桜井市字慈恩寺・脇本・黒崎にまたがり所在している。初瀬川右岸の河岸段丘にあり、三輪山から南に延びる丘陵の先端を一部切断して造成している。脇本遺跡は当初考えられていた以上に広範囲に及び、また、長い期間にわたる遺跡であることが判明している。遺跡の中心地は村の鎮守の春日神社である。
　発掘調査は、桜井市教育委員会、橿原考古学研究所の合同で行われ、本格的に昭和59年(1984)を第1次とし、以降第21次にわたる調査が行われている。発掘調査の結果、次にみる周期で、ほぼ100年おきに大型建物が建てられていた。

①　5 世紀後半
②　6 世紀後半
③　7 世紀後半
(3)泊瀬朝倉宮
　上記①では、掘立柱建物 5 棟以上、竪穴建物 5 棟以上、および大規模な石貼りの池もしくは環状遺構が検出され、泊瀬朝倉宮関連である可能性が高い遺構群とされている。発掘担当の前園実知雄氏は「脇本遺跡は朝倉宮」とされている[註 5]。
(4)泊瀬斎宮
平成 23 年(2011)の第 17 次調査では、上記③の大形掘立柱建物が検出された。
　南北　　3 間
　東西　　8 間
丘陵上に官衙のような建物群が存在することが明らかになった。7 世紀後半の天武 2 年(673)設置された「泊瀬斎宮」に時期的にも合致し、大伯皇女の「泊瀬斎宮」の可能性が高い。
(5)脇本遺跡の現状
　これらの遺跡は現地説明会の開催後、建物柱跡へ保護砂を入れ、埋め戻された。従って現状は更地の状況である。今この場に立ち、往時の雄略天皇の宮、あるいは大伯皇女の日々の潔斎の生活を思い浮かべれば、湧き上がる感慨も一入である

【閑話休題・地元に伝わる伝説】
　桜井市上之郷小夫は、長谷寺の門前を過ぎた谷奥に入る山村である。この村にある小夫天神社は、地元では倭姫命と大伯皇女の潔斎の地と伝えられてきた[註 6]。天神社の背後の山は「斎宮山」と呼ばれ、近くの修理枝(しれだ)の地には化粧川が流れ、倭姫命と大伯皇女が禊をしたと伝えられる「化粧淵(別名・化粧壺)」がある。平成 31 年 2 月近鉄長谷駅よりタクシーを利用して化粧淵を訪れた。小夫は山の上の集落であり、修理枝の畑を下る廃田の草に隠れて化粧淵はあった。茶色に染まる泥岩の上を細流が流れ落ちている。
現状では、高低差 1m に満たぬ滝の前の「しめ縄」が、化粧淵は此処と教えるのみである。

6.朝倉と外鎌山北麓古墳群
　初瀬は上古「葬地」として知られていた。その状況を『万葉集』にみてみよう。

巻 16-3806
「事しあらば　小泊瀬山の　石城にも
　　隠らばともに　な思ひそ我が背」。

柿本人麻呂は次のように詠っている。
巻 3-428

「こもりくの　泊瀬の山の　山のまに
　　いさよふ雲は　妹にかもあらむ」。

ここに二首をみたが、葬地としての泊瀬を詠った万葉歌は多い。それでは「初瀬の葬地」は具体的に「何処」なのであろうか。

(1)外鎌山北麓古墳群

初瀬谷入口にある外鎌山(忍坂山とも称す。292m)は、朝倉富士とも呼ばれ目立つ山である。この山の北東山麓は初瀬に属し、古来、古墳・墓が多数あることは知られ、外鎌山北麓古墳群と称されていた。この地域が「朝倉台団地」として造成されるに際し、昭和 47 年(1972)～昭和 51 年(1976)、橿原考古学研究所・桜井市教育委員会により発掘調査が行われた。
この結果 62ha の開発予定地の中に、38 基の古墳・火葬墓・中世墓等が確認された[註 7]。これらの墳墓は外鎌山から北に延びる 7 つの支脈上にあり、このうち古墳(35 基)は所在する支脈別に、次の区分がなされた。

竜谷支群　　12 基
慈恩寺支群　　15 基
忍坂支群　　8 基

この古墳群も造成に伴い消滅する運命にあったが、最もまとまりのある忍坂支群古墳の内、五つの古墳が団地内公園に移設され、保存されている。
初瀬谷全体を見渡して、他に古墳葬地はみられない。また、先にみたように初瀬谷内の知られる「陵」は唯一「吉隠陵」のみである。この状況から、初瀬谷の「葬地」は、外鎌山北麓と特定してよいと思う。

(2)穂積皇子の万葉歌　―吉隠とは何処か―

天武天皇皇子女の穂積皇子と但馬皇女の二人は、互いに恋を温めていた。和銅元年(708)6 月、但馬皇女は先立って薨去し、初瀬に埋葬された。やがて冬を迎え、冷たい雪が降りしきるなか、ひとり寒く眠る皇女を、皇子は思い浮かべ、次のように詠っている。

巻 2-203
但馬皇女の薨ぜし後に、穂積皇子、冬の日に雪の降るに御墓を遥望し、悲傷流涕し作らす歌一首
「降る雪は　あはにな降りそ　吉隠の
　　猪養の岡の　寒くあらまくに」。

皇子がつま先立ち、初瀬を「遥望した場所」は、藤原宮ないしは住まいの磐余宮と思われる。ここに詠われている「吉隠」は、初瀬谷最奥部の吉隠なのだろうか。吉隠には「葬地」はない。

(3)大伴坂上郎女の万葉歌　―万葉歌に詠われる「吉隠」を示すヒント―

万葉歌に詠われる「吉隠」の所在地を示すヒントが、同じ万葉集に潜んでいた。大伴坂上郎女が大伴家の田庄、鳥見山北辺の「跡見庄」に赴いて、農事に携わった時に詠った歌である。

巻 8-1561

「吉隠の　猪養の山に　伏す鹿の
　　妻呼ぶ声を　聞くが羨しさ」。

鹿の群れが呼び交わす呼び声は、「キューン」と甲高く、遠方まで届く。しかしながら、鳥見山北辺の「跡見庄」から、初瀬谷奥の実際の「吉隠」までの距離は、7～8 ㎞で鹿の呼び声は届かない。一方、初瀬谷の入り口にそびえる外鎌山までは、ほぼ 1 ㎞以内であり「鹿の居る場所と時」に応じて、鹿の呼ぶ声は聞こえる。

大伴坂上郎女は、外鎌山から聞こえる鹿の呼び声を聞いたのである。つまり、「外鎌山」を初瀬谷の「吉隠の山」の象徴として捉えているのである。

こう考えると、先の穂積皇子の 203 番歌も理解しやすい。外鎌山北麓には葬地があり、但馬皇女も同地に葬られた。203 番歌に詠われている「吉隠の猪養の岡」は、実際の吉隠ではなく、万葉人が「吉隠の山の象徴として捉えていた外鎌山北麓」であった。計らずも、鹿の「妻呼ぶ声」が難問を解く鍵となったのである。

7.おわりに

初瀬の谷には、これだけの多くの歴史が積み重ねられてきた。改めて感慨の深いものがある。

「過去はもう戻らない」。

しかしながら、歴史の学びを通して

「過去は蘇る」。

ここに蘇った「初瀬谷の事蹟と人々」。ともに過ごした時間に喜びを感じながら筆を擱(お)く。

―　了　―

［註］

［註 1］　『奈良県の地名』　　日本歴史地名大系 30　　平凡社

［註 2］　緒方惟章　「天智系の皇子たち」　『萬葉集講座第 5 巻　作家と作品』　有精堂　1973

［註 3］　『国史大辞典』　　吉川弘文館

［註 4］　橿原考古学研究所調査報告書　第 118 冊　『脇本遺跡　三』　2015

［註 5］　前園実知雄　『奈良・大和の古代遺跡を掘る』　学生社　2004

［註 6］　［註 1］に同じ

［註 7］　『日本古墳大辞典』　　東京堂出版　1989